

## 亡くなったキリギリスの母親(検察側証人)

### 検察官の質問

- ・息子とは遠く離れて暮らしていた(⇒助けることが物理的に不可能だったので、法律上保護責任は問われない)。
- ・アリとキリギリスは子どものときからの親友。
- ・キリギリスは、アリの命を救ったこともあった。
- ・アリは、よくキリギリスを家に招いて、バイオリンの演奏をしてもらっていた(⇒親友関係は継続していた)。
- ・キリギリスが「食料を分けてほしい」と頼ったのはアリだけだった
- ・人付き合いが苦手なキリギリスにとって、アリは心を許せるただ一人の友達。
- ・あの時、キリギリスを助けることができたのは、アリだけだった(⇒母親には言っていなかった)。

### 弁護人の質問

- ・キリギリスは、冬に備えて食料を集めていなかった。バイオリンを弾いていた。
- ・毎年、冬になると、バイオリンのコンサートを開いて、チケット代のかわりに、食べ物を得ていたが、今年は、深刻な食糧不足で客が集まらず、食べるものがなくなった(⇒キリギリスは、ただなまけていただけではなかった)。
- ・食べるものがなくなったのは、キリギリス自身のせい。自業自得(⇒それが、親友を救わなかったことの原因になるか?)。

## アリの妻(弁護側証人)

### 弁護人の質問

- ・キリギリスは「少しでいいので食べるものを分けてほしい」と頼んできた。
- ・アリは、「ギリギリ家族分しかないので無理だ」と断った。
- ・赤ん坊も含めて、子どもが8人。その子たちに、ひもじい思いはさせたくなかった。

### 検察官の質問

- ・家族10人が一冬越すだけの食料が確実にあった。一人分ぐらい絞りだせたのではないか。
- ・キリギリスは「少しでいい」と言っていた(⇒親友なのに、それさえもしなかった)。
- ・冬になると子どもの誰かが病気になる。十分食べさせてやれる食料を確保しておきたい。

## アリ(被告人)

### 弁護人の質問

- ・キリギリスが危険な状況にあるとは気付かなかった(⇒その翌日に餓死したのに、「気付かない」なんてことがあり得るのか?)。
- ・キリギリスは自慢の友人。バイオリンで大勢を魅了するキリギリスに憧れていた。
- ・友達のいないキリギリスが自分しか頼る相手がいないことはわかっていた。
- ・妻や子供をまもるため、苦渋の決断をした。あの日に戻っても、同じ決断をする。

### 検察官の質問

- ・アリは、キリギリスとしばらくの間連絡を絶っていた。
- ・連絡を絶つ前、アリは、キリギリスを家に招いてバイオリンの演奏会をしてもらった。
- ・「自分もあんなふうに演奏できたら…」アリは、誰もいなくなった部屋でバイオリンを弾く真似事をした。それをキリギリスに見られた。
- ・その時、キリギリスに「何やってんの?アリがバイオリン弾いてちゃだめでしょ。せっせと働くのが君たちの仕事なんだから」と言われた(⇒バカにされたのか?悪気はなかったのか?)。
- ・アリは、平凡で何の取り柄のない自分が恥ずかしくなった。キリギリスへの憧れが、強烈な劣等感に変わった。
- ・「食料を分けてほしい」とキリギリスが訪ねて来て、アリは「自分の生き方のほうが正しかったんだ」と優越感を感じた。
- ・アリは、親友であるにもかかわらず、少しの食料もキリギリスに分け与えなかった。それは、アリが「キリギリスが死ねば、優越感を覆されることがなくなる」と思っていたからなのか?
- ・その質問に関し、アリは「わからない」と答えている。